
魔法少女リリカルなのは ~ COPY ~

sam

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～COPY～

【Nコード】

N5482L

【作者名】

sam

【あらすじ】

十月、秋。小学四年生のなのははある日、ユーノもとい時空管理局から呼び出しを受ける。管制艦アースラにて告げられた会議内容は、『異世界にて少々厄介な事件が起こっている』との事。

その会議終了後、同件の重要参考人が海鳴市に出現。緊急出勤したなのはとフェイトとユーノを迎えたのは、不思議な杖を持つ少年だった。

序章（前書き）

本作は『魔法少女リリカルなのはA・S』時点、またそれ以降をもとに設定、描写しています。原作に忠実にアクションを多用していきますのでよろしくお願ひします。
ちなみに初心者です。

序章

序章

とある辺境の世界で、夜間にも関わらず、森で激しい闘いが繰り広げられていた。

時に誘導操作弾が幾百も天へと飛び、太い砲が木々の間を貫いた。二色の魔法光が夜の森林を染め上げているが、どうにも片方の魔導師の方が悪いようだ。その証拠に、一般的魔法光である純白のそれは他方の翡翠色の光に圧されている。

と、一つの男性の悲鳴が上がった。

「ぐあああああつ！」

叫びと共にその体は後方へと派手に吹っ飛び、幹に叩きつけられた。『バリアジャケット』と言う防護服によってダメージは軽減されているが、それ以前に彼自身、その防護を抜いての攻撃に既にロボロであり、身体各所から血が滴っている。手に持つ杖もヒビが奔っており、まさに満身創痍であった。

「かはっ！ げほっ！」

衝撃に咳き込みながら、霞みつつある焦点を眼前の敵に向けると、そこには同じく魔導師の装いに身を包んだ者がいた。

その魔導師は顔も身長も随分と若く、見るからに少年であった。ブロンドの髪は適当な長さで揃えられており、ジャケットは茶褐色のマントと簡素な服。明らかにその防御力は低そうだが、この戦闘が始まって三十分、ロボロな魔導師に対して、多少の砂埃による汚れはあれど、こちらは全く無傷であった。

「あーあ、やりがないなあ。もー少し粘れないんですかあ？ お兄さん」

いかにも少年らしい声で、目の前の魔導師に少年は明らかにナメた口調で言った。その手にある飾り気の無い杖をくるくると回しながら。

「ぐ……小僧、貴様……何者……」

「あれ、教えなきやダメですか？ もうすぐあなたは死んじゃうと言うのに、僕の名前に何の価値があるんでしょう」

見下した目でそんなことをぶつけられれば、不肖熟練の魔導師たる者、血が上らずにはいられない。

「おのれ……若造の分際で、生意気なツ……」

最後の力を振り絞り、彼は勢いよく立ち上がると、足元にミッド式魔方阵を展開、自身の杖に魔法の力、その脈動を通した。

「唸れ、光の鼓動よ！ 『ビーティングライト』 オツ……」

詠唱と技名発声、それと同時に円の外周から強く光が溢れ、次の瞬間には莫大な衝撃と閃光、高周波の音が彼と少年を巻き込んで広がった。

目晦ましとして使用される高位魔法、その効果範囲は当然少年にも及び、目を焼く激光の向こうに吹っ飛ばす人の形の影があることを彼は見、そしてにやりと笑った。

それが、彼にとって恐らく最後の光景だった。

『Shooting mode set up』

轟音が辺りを取り巻いている中、そのデバイスのコマンドボイスは綺麗に、しっかりと響いた。

『Divin』

既に力を使い切り、あとは転送魔法で離脱するのみ……それだけであったにも拘らず。

『Buster』

自分の後ろで鳴る、砲撃の為の不吉なチャージ音は、一体誰のものなのだろう。

翡翠の光を彼の体が遮り、その形通りに影を作った。

「やれやれ……。大したスキルも無い魔導師相手に闘うってのは、ホント無駄骨だよ」

一本の翡翠色の砲線が、満月を横切って天へと突き刺さった。

複製する者（前書き）

書き忘れましたが、序章と合わせて、横読み推奨です。

複製する者

「え？ 今から『アースラ』に？」

『うん、緊急の呼び出しだってさ』

高町なのはは宿題をする手を止めて、顔の横にある通信用の窓、その中に納まっているユーノ・スクライアの顔を見た。

時は十月、夏の残暑も何処かへ、なのはは現在小学四年生となっている。無事進級、最近勉強も難しくなりつつあり、相変わらず理数系以外が破滅しているこの時期、殊勝なことに自ら予習と宿題に打ち興じていたその最中、ユーノが連絡を取ってきたのだが

「緊急かあ。うん、すぐに行くよ。 あ、フェイトちゃんは？」

『この通信が終わったらすぐに回すよ。まあ、クロノ辺りから聞いてるかもだけどね。じゃ、なるべく早めに。ああ、ご家族にもよろしくね。この夜晩に出かけたら僕が怒られるから』

「うん、じゃあ向こうでね」

窓が消え、なのはは一旦シャープペンとノートを整理してから、ハンカチの上に置かれている待機状態のレイジングハートを手に取った。

「レイジングハート、次元転送魔法の準備、お願いできる？」

『All light, my master』

快く引き受けてくれた愛機を首に提げ、両親に一言断ると、なのはは外に出た。すっかり涼しい昨今なので、上着を羽織ることも忘れずに。

小走りで最寄の公園まで行き、人目が無いことを確認すると、一段と人気の無い獣道へ。やがて普段から魔法の練習場として利用している高台に着くと、なのはは意識を集中した。

「次元転送、目標座標」

複雑な数字の列の詠唱を行なっている途中で、鈴の音にも似た音と共に、足元に桜色に光る魔法陣が出現した。円と四角形を基調と

し、円周内部に奇怪な文字列が描かれている。現在第一世界”ミッドチルダ”を初め最も多く普及している魔法術式『ミッド式』を表す陣である。

『M a s t a r』

「ん？ なに、レイジングハート？」

『H a d b e t t e r n o t w e a r a u n i f o r m
？（制服を着た方が良いのでは？）』

「あ、そっか」

準備も万端と言うところで、慌てて『バリアジャケット』の着用の要領で白の制服を纏う。

では正装になったところで気を取り直して、

「転送っ！」

気合を含んだ声で高く叫ぶと、なのは自身の体がやがて薄く透け、次第に不可視に、終には魔方陣ごと消えた。

一瞬の眩暈にも似た感覚に襲われながら、ゆっくりと目を開くとそこは故郷・海鳴市が一望できる山の中腹。ではなく、硬質な床と廊下と天井、そして、見慣れた顔だった。

「あ、ユーノ君。こんばんわ」

「こんばんわ、なのは」

目の前に立つ自分の魔法の師 ユーノ・スクライアは、挨拶と共に薄く微笑んだ。

現在ユーノは時空管理局本局にある別名”世界の記憶”、正式名称『無限書庫』の司書を勤めている。数億を越える蔵書の整理にまだ少々手間取っていていやあすっごい忙しいよしかもクロノの奴次から次へと仕事押し付けてくるし執務官ってみんなあんな感じなのかなフェイトにはあんな風になってほしくないなと先日愚痴をこぼしていた。

「じゃ、着いたところで、早速行こう。クロノが首を長くして待つ

てる」

「うん。フェイトちゃんは？」

「ちよつと前に着いた。『八神家』にも連絡したんだけど、そっちはまだかな」

「そっか」

歩いて数分、自動ドアを潜ると、そこはいつかの『闇の書事件』で何度か入ったことのある会議室だった。長机　と書くと少々安っぽくなるが、実際は会議用スクリーンのコンソール役も勤めている、結構なお値段の代物が室内の中央に鎮座し、周りに複数の人物が座っていた。

その遙か向こうに、『アースラ』艦長でありクロノとフェイトの母であるリンディ・ハラオウンが、茶を啜っていた。

「あら、なのはさん。どうぞ、入って」

「し、失礼します」

緊張気味になのはが応えた理由は、その長机の周りにある顔触れがどれも敵ついものだったからだ。中にはクロノやエイミイなどの馴染みの顔もあるが、それ以外がなんとも不機嫌そうな顔であり、入局して数ヶ月が経つなには、そのどれもが本局のお偉いさんだと分かった。

そんな彼女の強張りを、

「なのは」

優しい響きが包んだ。

声のした方に振り向くと、そこには綺麗な金髪を背に流した、黒い制服に身を包む親友の顔があった。

「あ　。フェイトちゃん！」

思わず大きな声を出して周りの上官に一瞬睨まれたが、なのは本人はそんなことは無視、その少女の胸に飛び込んだ。

「わ……と……」

動揺した声を出す少女は、しかし自分の胸に潜り込むのはの頭を優しく撫でた。

少女の名前をフェイト・Ｔ・ハラオウン。Ｔは旧姓のテストロツサの略称であり、何故姓が二つもあるのかといえば、今年の五月にフェイトは正式にリンディの養子として引き取られたことに所以する。ちなみに、横に座っている黒尽くめの少年、クロノ・ハラオウンは、彼女の義兄に当たる。

現在は時空管理局執務官候補生と言うことでクロノとエイミイのもとで日々勉強に励んでいる。そのせいか休日など暇さえあればちよくちよくこの船まで足を運んでいるので、中々どうして日本では会う機会が少ない。

「久しぶりだね、フェイトちゃん！ モー、ちつとも連絡くれないんだもん！」

「う、うん、久しぶり、なのは。あのね、もう少し声、小さくしたほうが、いいかな……？」

「そうだぞ、なのは。一応ここは改まった場所だからな」

身長が伸び始め、声変わりも始まりつつある少年クロノは、掌を自分の正面でひらひらと振って、なのはにこの状況と空気を読めと促した。

「あ……す、すみません……」

なのはが縮こまり、席についた所で、

「すいませーん、遅れましたー！」

関西方面の訛りで以って、元気な声が入り口から響いてきた。

全員が振り向くと、そこには茶髪の茶色ジャケット、その横に赤毛の少女とポニーテールの女性、後ろに金髪の白衣の女性と蒼い狼が立っていた。

「お、八神家も来たか」

クロノが言った。

先頭にいる茶髪の少女は八神はやて。数ヶ月前に世界を揺らがせた（その癖終わってみれば死傷者0の異例）『闇の書事件』の第一人者であり、闇の書 本名『夜天の書』の主である。ちなみに、悪かった足は既に完治寸前であり、今や自力で歩いている。

赤毛の少女は『鉄槌の騎士』ヴィータ、背の高い女性は『剣の騎士』シグナム、金髪白衣の女性は『湖の騎士』シャマル、狼は『盾の守護獣』ザフィーラ。四名は何れもはやてに仕える古代ベルカの『騎士』、名を『ヴォルケンリッター』と言う。

はやては現在、时空管理局特別捜査官候補生の役職についており、その他四名は武装隊所属、捜査官補佐として働いている。

「お、なのはちゃんにフェイトちゃん！ ごめんなー、ヴィータがトイレに入ったら遅れてもって」

「言わなくていいよはやて！！」

顔を真つ赤にして両腕を振るヴィータを温かい目で見た後、クロノが立ち上がった。

「さて、その五人も空いてるところに座ってくれ。よし。それでは、本局より御足労を願ってしまい、申し訳ありませんでした。それと、喧しくてすみません」

まずお偉いさんにぺこりと頭を下げ、その後全員に目を配った。
「本日ここにいる全員を呼んだのは他にもない。現在、異世界で少々厄介な事件が起こっているんだ。今回はその対策会議として、召集した」

エイミーに目配せし、メッセージを受け取った彼女はホロキーボードを手早く操作した。

と、机の真ん中にある赤い宝玉（否：レイジングハート）がきらりと光り、長辺に向かって大きな水色のウィンドウを展開した。そこに映っているのは、一つの映像と、その脇に複数のグラフや文字列。徐々に照明が薄くなる室内。

「どうにも奇怪な事件なんだ……まずは、ビデオを見てくれ」

視聴後。

「ふむ……。なるほど、これはこれは……」「クロノ君が言うとおりに、少々厄介ですな」「これを新人に任せるのは気が引けますな。」

部隊を立ち上げるとしましょうか？」

明かりが再び満たされた会議室にて、管理局のお偉いさん達がざわめき始めた。

「お静かに！ レジラス一等陸佐、何かご意見は」

クロノは目を前に向けて、そこに座る大柄な男に促した。

「んむ……。こ奴の特性、ひとまず挙げて貰えるか」

「はい。エイミィ」

「はいよー」

ピピピとキーボードを打って、各人の前にそれなりのサイズのウインドウを開いた。

「では。簡単に言うと、『複製』です」

「ふむ」

レジラスと呼ばれた大男だけではなく、全員に向けてクロノは説明を始めた。

「詳細はまだ不明ですが、現時点での情報によると、対象は自身のデバイスを使って相手の技、主に、魔法を走査して、自分の物にする と言っものようです。それも使用回数は無限に近く、自身の魔力は相応の浪費をしますが、逆に言えば、尽きない限り永久に使える」

「なるほど。対策は考えているのか？」

「数案出ていますが、本日は決裁も兼ねています」

「ふむ。出してみてください」

「はい」

暫しなのはもフェイトもユーノも八神家も抜きで話が進み、

「では、これで行くでしょう。異論は、ありませんか？」

「少々危険ですが、まあいいでしょう」「どやされるのは一佐ですからな」「私は知りませんよー」「む……。まあ、いいでしょう。」

クロノ執務官、話を進めてくれ」

「は、はあ。では……。なのは、フェイト。聞いてたか？」

「ふえっ？ あ、き、聞いて、なかったかも……」

「わ、私も、です……」

「ああ気にするな、新人にはつまらない話だしな。こんな所じゃなけりゃ、家の提督も居眠りしてる」

「え、いや、クロノ!? そんなことは、決して」

「続けよう。なのはとフェイトとユーノは現場に行つて、偵察をしてきてくれ。反応が出次第連絡するから、その都度二人で向かつてくれ。対象は、出来ることなら無傷で回収したい。バインドで仕留めてくれ。必要なら、まあ魔力行使も許す」

「うん、分かった」

「りょうかい」

「うん」

「八神家は、ヴィータとシグナムは必要になったら二人に付いていくこと、はやてとシャマルとザフィーラはバックアップだ。はやては指揮、シャマルは医療、ザフィーラは支援。それでいいか」

「おう！」

「了解だ」

「ええよー」

「はーいっ」

「心得た」

「よし。では解散だ。改めて言うが、相手の魔力反応が出次第連絡するから、いつでも向かえるように準備を」

ヴィーッ ヴィーッ

室内を赤い光が満たし、エマージェンシーコールが響いた。エイミーが反射的にキーを叩き、

「あ……海鳴市に反応が。えっと、事件対象と同じだね」

「……………」

タイミングが良いのか悪いのか判別し辛い襲来に暫し黙してから、クロノは言う。

「……なのは、フェイト。偵察、頼む」

『はいっ!』

何が楽しいのか、二人は声を合わせて早速会議室を出て行った。

「では、我らも」

「んだな」

シグナムとヴィータも、自分の待機状態のデバイスを弄びながら、

「んじゃ、私らもいこかー」

「はいっ。はよてちゃん、指揮お願いしますね」

「よろしくお願いします」

「えーと、クロノ……」

「何も言つな、ユーノ。配置についてくれ」

さて、蜻蛉帰りに地球まで帰還した二人と一人は、

「エイミィさん、反応ってどこら辺ですか?」

『近いよ。この場所は……やばい、民家周辺だ!』

「えええっ!?!」

「あ、早く行かないと! マップ出せる、エイミィ!?!」

『はいよ、すぐ送る!』

早速慌しく動き始めていた。

送信されてきた地図に従い、高速飛行で向かうと、何とまあ、既に火柱が上がっている。

「結界も張ってない……クソ、いくらなんでも危険すぎる!」

「ユーノ君、結界お願い! フェイトちゃん!」

「うん!」

横の金髪少女が返事をした瞬間、その姿が掻き消えた。ちなみに全員、既にバリアジャケットは着装済みである。

金色の軌跡を残して飛んで行った親友を認め、なのははそれに続く。ユーノは上空へと飛翔し、広域結界の展開の準備を始める。

「さて、こんな所かな……」

炎に包まれている民家を見下ろしながら、少年は誰に言うでもなく呟いた。

一見して魔導師と取れる少年は、その手に杖を持っていた。

何の装飾も無い、と言うよりただ木の棒を削ったような、簡素の上に簡素を重ねたそもそもデバイスなのかどうかも疑わしい、そんな杖だった。

「じゃ、止めにもう一発……」

言いながらその杖を振り上げて、破壊的魔法を繰り出そうとしたその時。

キーンッ!!

鈴の音にも似た音響と共に、下ろされる筈の右腕が止まった。

不思議に自身のそれを見ると、手首に金色の枷がはまっていた。

ふと気づけば、自分の両足にも同じ物が絡まっている。

「時空管理局です」

聞こえた声は少女のもの。首だけ動かしてみれば、綺麗な金髪を二箇所で縛った、死神の印象を受ける少女が、少年の頭部に向けて黒き戦斧を向けていた。ほぼ同時に、視界の端がドーム上の魔法で覆われていく。

「管理世界での無許可の魔力行使、及び民家破壊の容疑で、あなたを逮捕します。抵抗しなければ、あなたには弁護の機会がある。同意するなら武装の解除を」

抑揚のない声で、事務的に一気にそこまで言った少女は、それ以上何も発せず、ただ少年が降伏するのを待った。

だが。

「……やれやれ、やっと来ましたか」

言うや、その姿が消えた。

「ッ!？」

一瞬遅れてバインドも弾け、流石の反応でフェイトは手にある武器を引き、体ごと右回転、後方に身構えた。

そのステップの終了と同時に、衝撃が襲う。

まんまとバルディッシュの持ち手部分に攻撃が当たり、予想通りとはいえフェイトは派手に吹っ飛ばされた。

しかし、そこで終わるほどこの執務官候補生はヤワではない。

『Plasma Lancer』

バルディッシュの渋い男性の声色でコマンド発声がなされ、リボルバー状のカートリッジシステムが作動、一発ロードした直後に斧の先端に雷の槍が形成され、発射された。

迅雷が如き速さで少年へと槍は近づき、間もなく直撃した。

フェイトがビルに落下するのと、少年へ攻撃がヒットしたのは、ほぼ同時。

(くっ　なのは!)

要求を拒否されたことを伝える念話でなのはへと合図を促し、受け取ったなのははすぐさま準備していた杖を向ける。

「レイジングハート!」

『All light, Accel Shooter』

こちらはマガジンが作動、やはり一発装填してから、桜色の弾丸をその身の周りに形成し、野球ボールサイズまで膨らませる。

「シューッ!」

命令と共に弾丸は下方へと高速で飛び、煙立つその場所へと殺到、バババババと次々に当たって弾ける。

既に問答無用の力で叩く事を腹に決め込んでいる二人の少女は爆発点に飛翔、二方向から挟む形を取った。

(出てきたところを押さえる。ユーノ、バインドの用意、できる?)

(ん、行けるよ。上で構えとく)

応答を聞いたフェイトは、手にある漆黒の杖を傾け、無言の命令をそれに送る。

受け取った戦斧は、

『Load Cartridge, Haken form』

魔力強化、その後斧の部分を回転させ、それが元あった場所に光の鎌を顕現させた。

後はあの煙の中から相手が出てくるのを待つのみ。例え二人の守備範囲外である上空に逃げようともそこではユーノが捕縛用魔法を用意して待ち構えており、果敢にも片方に向かってくれば瞬時に対応できる。なのははフェイトごと撃ち抜く覚悟で、フェイトはなのはごと切り裂く気合で。

何故それほど危険な行為に身をやつすか？

答えは簡単、二人は『例えそうなくても、フェイトちゃん（なのは）ならどうにかなる』と言う、全く安全性の保障の無い、しかし確固たる信頼によるものだ。

しかし、少年魔導師の反応は意外なものだった。

「ゲホゲホ……やれやれ、管理局は敵対意思が見られればすぐさま砲撃する輩揃いですか、まったく」

次第に薄くなる黒煙の中、少年は手を口元に当ててわざとらしく咳き込みながら、呑気なことを言っていた。なのはもフェイトも一瞬身をびくりとさせるが、落ち着きを失わずその矛先を相手に向けて続ける。

「まあ予想はしていた反応ですけど……。でも、少々魔力が強すぎるな。ちよつと行き過ぎた罪人を抑えるには威力が高いと思いませんか？ そちらの白装束さんに死神コスプレさん」

「しっ、しろしようぞ……」

「こ、コスプレっ……!？」

好きでやっている自分の装甲を侮辱された気分になり、かなり力チンと来ている二人を、

（抑えて二人とも！ それは陽動だ！ 真に受けたら負けるよ！

だいじょうぶだから、ふたりともすっごく似合ってるから！）

ユーノが必死に食い止める。

が、そんな説得も虚しく、

『Shooting mode Set up』

『Plasma Smasher』

容赦の無い怒りのオーラとコマンドが両魔導師及び両デバイスから発せられる。

「デイバイン」

「プラズマ」

管理局員とは言えやはりまだ小学四年生相当の子供の精神を甚く傷付けられたことへの一時の憤慨、忘我の極地にて、双方容赦ない一撃を加えんと魔力を集中する。

「ちよ、二人とも」

念話すら意味無しと感じ、思わず声で叫ぶユーノだったが、もはや二人には如何なる音も届かない。

「バスタ ツー！」

「スマツシャーツー！」

ゴオツ ！！

桜と金の野太く眩い砲線は対して余りにも小さい人物に躊躇いも無く向かい、

ドツ ゴアアアアア

.....

また何の躊躇いも無く、ぶつかつた。

手加減無し、曰く『全力全開』の砲撃は空中で派手に交わり、爆煙と衝撃を辺りに拡げた。撃つた当人達も自身の反動と余波に押され、数メートル後ろに飛ばされる。

撃つた直後に、あ、しまったと気づいた魔導師二人は、まあ捕まえやすくなつたしいいか、そもそも向こうが侮辱したのが悪いんだからっ！ とプラス思考に切り替え、しかし尚も手の武器を対象に向けることを止めない。

ぶつちやけた話、あれだけの高威力中距離魔法を二発同時に被弾

しては、いくら非殺傷設定とは言えただではすまないだろう。事情聴取は数カ月後と、管理局は覚悟したほうがいい。当然、上官にきつちり絞られると言うことも。

ちえーと顔をしかめた二人は、煙が薄くなってくるのを見ると、すぐに気を引き締めなおした。怒られるのは未来の話だ、今は現在の状況に対処すべきだ。

少なくとも行動不能には陥ってるだろう　そんな魔導師達の予想は、

「ゲエホゲホゲホ…… ああ全く、シールド張る羽目になるなんて……」

軽々と裏切られた。

「な……」

絶句の言葉を発したのはユーノだった。長年二人の無茶っぷりを観察及び体感しているこの少年は、そしてこの二人の力量を誰よりもよく理解していた。特になのは偶然とは言え余りに強大な魔力を保持している。フェイトの魔力ランクもほぼ同等であるし、そんな二人の砲撃、食らって無事でいるはずは無い

少年の方と言えば、この二発の着弾を生身で受けるとどうなるかは分かっていたようで、空いている左手を横にピンと伸ばし、足元には翡翠色に光る魔方陣を、その体の外周には同じ色に輝く半円の殻が展開されていた。『シエル・プロテクション』と呼ばれる魔法であり、下以外の全方向からの攻撃を防ぐためのシールド系魔法である。

しかし、あんな薄い防御魔法で二人の砲を受け切るとは……。こう言った魔法の技術に長けているユーノは、大いに驚愕していた。驚いているのは当の二人組みも同じであり、まさか自分の（全力では無いとは言え）本気の魔法を、しかも自他共に認める破壊力を誇る砲撃をシールド一枚で防ぐなんて……。

余程魔力が強いのか、それとも弾きやすい角度で防いだのか。どちらにしても、あの少年には類稀なセンスがあるのは間違いない。

戦技教導隊入りを目指すのはは特に、少年の内なる力を見抜いていた。

「……お、そろそろいい時間だ。そんなじゃま、ボチボチ始めますかね……。マモー」

少年は外郭を解き、恐らく右手にある木の棒とも見紛う杖に話しかけた。

「どうだ？」

咄嗟には意図が掴めないその問いに、

『Both the copying and the save are already completed. (複写も保存も、既に完了しています)』

やはり意味不明な応えが返ってくる。

しかし少年はその応答ににやりと笑い、

「上出来。さて、その管理局お三方！」

ユーノにも聞こえるよう、声を張り上げた。

「寄ってらっしゃい見てらっしゃい、これより始まる愉快的喜劇、とくとご覧あれ！」

とても楽しそうにくるくると杖を振り回し、ぴたりと正面に構えた。

「僕の右手には、何の変哲もない古代遺産、『ロストロギア』がありまーす」

いきなり重大告白である。

「ろ、ロストロギア、つて……!?!」

「な……おいおい、何でそんな物を一般魔導師が持つてるんだ！」

管制艦『アースラ』にて、エイミィとクロノはほぼ同時に叫び、

「ロストロギア……あ、まさかあれて……!」

ユーノは記憶の端にある何かを思い出し、確認のために下を向く。そして、

「(やつぱり……。なのは！ フェイト！ ダメだ、そいつを早く抑えないとー!)」

念話と共に叫んだ。

「え！？ で、でも……」

(躊躇ってたらそいつにやられる！ 早くしないと)

「さて、ロストロギアと言えば洩れなく特殊なスキルが備わっている物です。僕のこの愛杖も外れることなく、恐らく世界に一つだけの機能を備えているんですねー」

ユーノが必死になっているのと同時に、少年魔導師はお構いなしに続ける。

「さて、その機能とは？」

口で説明するのは面倒なので、実際

に見てもらいましょうか」

(な……まずい！ なのは！ フェイト！ 何でもいいから抑えつけて……！)

ユーノの懇願が届くより前に、

「マモー。メモリーロード」

少年の、突然冷ややかになった命令と、

『Reading』

いまだかつて、聞いたこともないコマンド。

二つは魔導師の耳に届き、

『Divin Buster and Plasma Smash
』

杖先をなのはに、左掌をフェイトに。

眼前にあるのは、今さっき撃った自分の砲頭。

色こそ違えど、それは間違いなく、オンリーワンの筈の魔法。

「それでは……これが僕の相棒『マモー』の力、名も『コピー&ペー
ースト』でありました」

脳での処理が追いつかない二人の目の前で、弾頭は確実に膨れ続
け、ついには三方の身の丈を越える大きさに。

「食らえ、己が砲撃」

冷たい掛け声、

『Fire』

冷たいコマンド。

翡翠の砲線が、真一文字に、夜の空を横切った。

対策

それが、今から四時間前の話。

「酷いな……」

そんな呟きが、クロノの口からこぼれた。

「まさかなのはちゃんとフェイトちゃんかねえ……。上には上がいると言っか……」

「この場合は、あのデバイスの力……もとい、ロストロギアの力だな」

中央司令室、エイミイの指定席にて、二人は浮かない顔で、浮かぶ画面を睨んでいた。ユーノも相席しているが、こちらはむしろ沈んだ表情である。

そこに映っているのは、先程の戦闘の録画映像であった。

一本の砲 に見える二本の砲線は、二人の若い魔導師の身体を飲み込み、そして墮とした。

魔力ダメージによつて、体に外傷が付かないぶん、急激な疲労を強いられた二人は敢え無く気絶、滞空の為の飛行魔法も解けてしまひ、(フェイトに至っては二度目の)墜落を喫した。

撃った当人は杖と己の手を引き、杖は排熱孔から煙を出し、魔導師は反動を払うように手を振った。そして落ちて行く二つの影に蔑んだような眼と笑みを向け、

数瞬としない内に、身体を鎖が囲んだ。

少々目を張った少年は、しかし動じることなく杖を振り、とある魔法を発動する。途端、少年の身体を中心に無色の衝撃波のような物が波打ち、バインドを根こそぎ消し飛ばした。

ふいと顔を遙か上空に 現在いる空中も結構な高度だが 目を向け、そこに居るもう一人を見つけた。そして恐らく、二人の魔

導師が気を失った今、この結界を保持しているのはユーノだろうと察した。

果たしてこの予想は的中したのか、一瞬でユーノの後ろを取った少年は、フェイトにもそうしたように打撃を加えようと試み 咄嗟に展開された魔方陣を盾とする『ラウンドシールド』に阻まれた。だが少年にはそんなことはどうでもいい様で、防がれていながら更に力を込め、シールドごとユーノを下方へ突き飛ばした。

ユーノは改めて少年の魔法の素質に顔を歪め、空中で無理矢理運動エネルギーを押さえつけ、落下を制し、次なる攻撃に備えた。が、遅かった。

既に少年は目の前まで距離を詰めており、恐らくフェイトの『ハーケンセイバー』のコピーと思われる 杖先に浮かぶ球体から伸びている鎌で、再びユーノに振りかぶっていた。

流石に驚いたユーノはまたシールドを展開した。が、攻撃力も同等な筈のその鎌は予想以上に強く、メリメリと盾に食い込み、遂には破り去った。

砕けた緑塵に忘我しているユーノへ、少年は身体ごと回転して、遠心力を利用して斬りかかる。

本来サポート重視のユーノの『バリアジャケット』は装甲が薄く、過度なダメージには耐え切れない仕様になっている。構造はその通りに作用し、真正面から振り下ろされた翡翠色の鎌はユーノの胸を捉え、何と付属属性までコピーするのか、紫電をおまけに付けてに吹っ飛ばした。

勢いよく付近のビルに衝突し、ユーノの意識は飛んだ。同時に結界が薄れ、あちこちに穴が穿たれている状態で夜の喧騒が復活し始めた。

少年はと言うと、これ以上留まるのは危険だろうと判断してか、夜空を高速で飛翔し、どこかへと消えた。録画映像はその最後まで追っていたが、やがて十分な距離をとって移動魔法を使い、今度こそ消えた。偵察として派遣された三人は、結局サーチャーを付ける

ことも出来ず、ただズタボロになった状態で眠っていた。
約十分後、ヴィータとシグナムとシャマルが駆けつけ、応急措置を施してから救出、この船まで運んできた。

映像はここで終わっている。

現在なのはとフェイトは医療室にてシャマルの治療を受けており、主治医によるともうじき目を覚ますとのことだ。ただすぐに身体を動かすのはお奨めできないらしく、朝には退院となるがどう考えても学校には遅刻するので、既になのはの両親には連絡を取っており、学校に連絡することを依頼、承諾された。

ユーノは、意識が飛びこそすれ、数分で取り戻し、幸い軽傷だったのでシャマルの治療魔法を受けた時点で即退院、クロノとエイミイ両名の脇で録画を観ていた。

「……ごめん」

ユーノは、自分の不覚を恥じるよう、誰に言うでもなく詫びた。
「ユーノ君が謝ることは無いよ。あんなスキル、誰にも対処できないよ」

「ああ、元々そのための偵察だったんだ、こうなることは予想できた……。謝るべきは、僕かもしれないな、すまなかった」

このまま行くと話が進みそうにないので、エイミイが助け舟を出す。

「で、問題の敵さんのデバイスだけ……」

「ああそうだ、絞れたか、エイミイ？」

「あつたよー。『無限書庫』の人達に探してもらった。後でギヤラ払っとかないとね」

言いながらピピピとキーボードを繰り返り、録画ウィンドウを消してから、また新しい画面を出した。

「 検索指定遺失物ロストログア、第三〇七二号『マモー』。それがその名前」

ブワオオオン、と言う効果音と共に、回転する杖が立体的に表示

された。

それは、ただ単に少々太めの木の棒を先細りに削っただけのように見える。良く言えば古き良き魔導杖、悪く言えば手作り感見え見えな工作。

四角錐のその杖に関する情報を、エイミーがつつらと語る。

「外見は簡単だけど、そのぶん中身の仕様が凄いや……。この杖は太い方の先端部分が三段構成になってる。一番上の段が排熱孔、二番目が恐らく本体、三番目がこのデバイスの最大の特徴、『スキヤナ』」

「スキヤナ？」

「そう。スキヤニング自体は二段目の本体でするみたいで、三段目からその先は『メモリースロット』って言うのになってる。簡単に言えば、『コピーした技を保存するメモリ、その収納場所』ってとこかな」

「ふむ……。それで、『このデバイスの最後の特徴』とやらは？」
「改めて言うけど、『スキヤニング』だね。詳しいことは実際に体感した二人に聞くとして、さっきの映像を見たとおり、この技は相手の魔導師の魔法をスキャンして、自分の物にすることが出来る。ちよつと前のクロノ君の説明と対して違わないよ」

「なるほどな。なのはの『デivainバスター』、フェイトの『プラズマスマッシュャー』。二人が多用するクロスレンジ技をコピーされたか……。更に最悪なことに」

「コピーした以上、『ほぼ無制限に扱える』。これが厄介だね」
クロノの語尾をエイミーが繋いだ。軽やかに指を奔らせ、もう一つの画面を出す。それは、先程の映像の一部をトリミングした物だった。なのはとフェイトが怒り狂った末に放射した砲、それをそっくりそのまま返した少年。

元々不定形な筈の魔導砲だが、その形状をも全く擬態するとは、怖ろしいスキルである。

「しかも、属性付与までコピーするとは……。ユーノ、お前が食ら

ったあの鎌、確かに？」

「うん、フェイトの物と同じだった。しかも、変換プロセスを踏ま
ずに電気を発生させてた……。多分、属性が付いてる物はことごと
く複写されると思う。例えば変換資質を隠して闘っても、あのスキル
の前では見破られて結局写されるだろうね」

「同じような事例は数百年前に何回かあったけど……とすると、そ
の時の被害者の魔法もコピーしてるってことになるね」

「やれやれ、また厄介な事案を抱えてしまった……。しかも、また
ロストロギア絡みだ」

クロノが嘆息と共に言ったとき、丁度よく後ろのドアが開いた。
そこに立っていたのは烈火の将シグナム。

「ああ、そこのお三方。テストロッサ達が目を覚ましたぞ」
「ああ、今行く」

返事をしたクロノは、ユーノを伴って（エイミィは一応まだ仕事
中なので）、司令室を出て行った。

「あー、ユーノ君にクロノ君、やっほー」

入室した二人を出迎えたのは、なのはのそんな呑気な声だった。
中にははやとヴィータとシャマル、ザフィーラも付いていた。

「どうやら、大丈夫そうだな」

「受けていたのは魔力ダメージだけだから。もう少しすれば、無事
退院ですよ」

主治医のシャマルが微笑と共に言った。高度の施設と彼女の魔法
は、この世界では折り紙付である。

「ごめんなのは、フェイト。僕がもう少し早く気づいていれば……」

「うっん、ユーノ君は悪くないよ」

「そうだよ、まさかあんな魔法があったなんて、私となのはも想像
できなかったんだから」

「うん……」

「ああ、そういえばユーノ、さっきの戦闘でも何か気づいていたよ
うだな」

クロノが問うと、

「ああ……。あのマモーって言うロストロギア、昔読んだ文献にそ
ういう名前があった」

「流石、スクライア一族だな」

「それに」

ユーノは続けて言う。

「あの魔導師……多分、僕の親戚だ」

「……何？」

「あのジャケットも、髪の色も……スクライアに見られる特徴だよ。
あのデバイスの扱いも妙に慣れてたし、防御魔法なんかはあれに依
存してない、オリジナルの物だ」

「何と……ということは、高町やテスタロッサの砲を防いだ盾は、
自前の物だと？」

「そうなる。全く、恐ろしく高い技術を持つてるよ……」

驚いているのは室内の一同全員だったが、一番驚嘆しているのは
なのはとフェイトの両名だった。自分の本気を自前の盾で防がれた
ことにも吃驚だがまずユーノに親戚がいたこと（そりゃいるだろう）
に一番吃驚である。殆ど幼馴染同然の関係なので、知らないところ
がまだまだあるなあと改めて実感したのだった。

「しかし……なら尚更、何故お前の親戚があんな暴動に出ているの
だ」

シグナムが尋ねた。それにユーノは、

「分からない。ただ、僕より若そうだったから、あのロストロギア
の力に吞まれて悪戯に行動しているだけっていうのが考えられる」

「見るからに悪質だもんなあ、あれ」

ヴィータが頷きながら言った。

「ともあれ、放っておく訳に行かないのは変わらないな。 なの

はもフェイトも元氣そうだから、ここで現状における対策を話して

おこつ」

クロノは二人に目を向けて、ざっとマモーに関する情報を話した。そして、

「既に敵は複数の技をコピーしている。なのはの『アクセルシューター』『デイバインバスター』、フェイトの『ハーケンセイバー』『プラズマランサー』『プラズマスマツシャー』。どれも二人の主力になる魔法つて言うところが痛い、対策の仕様はある」

クロノは全体を見渡し、まずなのはとフェイトに、

「まず、奴と合間見える時に主力となるのはなのはだ。無属性だし、一撃一撃が全て相手に致命傷を与える。まあフェイトもそうだが、君の場合はどうあっても属性が付いてしまう。属性付与というのは面倒だから、できるだけ隠しておきたい。すまないが、今回はなのはのサポートに回ってくれ」

「分かった」

「ん、サポートだね。そうだね、避けたほうが良いかも」

「そして八神家だが、基本的には色々動いてもらう。シグナムとヴィータは最初からなのはとフェイトに付いて行き、対象の捕獲だ。容赦なく、遠慮なくやってしまえ」

「おう。ちなみにやるって事は、思い切りブツ叩いていいんだな？ いいんだよな？」

「了解。ところでやると言う事は、真剣で斬り捌いていいのだな？ いいのだよな？」

「好きにしる。なのは、フェイト、欲求不満の騎士達による死人が出ないように注意するんだ」

「う、うん」

「頑張ってみる……」

「つか、シグナムだって属性付与があんだろ。自重しといたほうがいんじゃない？」

「む……。まあ、後方から援護に回るとしよう。幸い遠距離でも届く技がある」

「はやては後方に下がって狙撃だ。奴のスキャンが届かない場所に待機して、機を見計らって撃て」

「はいよー。広域型の出番やね」

「シヤマルとザフィーラだが、アースラで待機だ。医療面で働いて貰う」

「はーいっ」

「心得た」

「よし。では全員配置についてくれ。幾らなんでも頻出することは無いだろうが、反応があるまで皆、いつでも出動できるように準備していてくれ。なのはとフェイトはそのままゆっくり休んでいる」

全員が了承し、散り散りになる瞬間

「 僕は？」

ユーノが抗議した。全員一斉に立ち止まり、「あっ」的な顔をす
る。

自分に向けられたものと察したクロノは、

「ここで待機だ。それと、今からスクライアに連絡を取ってもらう」

「へ？ ああそうか、身元を割るためにだね」

「そうだ」

実は、敵対する少年のデバイスの情報は判明したものの、その使い手自体の情報はほぼ皆無であった。そのため、クロノはユーノをここに残るよう指示した。

「最近、一年以内に失踪した者がいるかどうか、確認してくれ。君は暫らくミッドに帰っていないだろうから、そこらには疎いだろう」
「まあね。たまには帰ってこいって言われてるんだけど……。いいよ、何なら今すぐに」

「頼む。では全員解散だ」

なのはとフェイトとシヤマル以外がそろそろと部屋から出て行き、三人だけが残された。

「とは言うものの、お二人はまだ入院中ですからね。朝には退院できるけど、それまではゆっくり休んでなさいね」

「はい」

なのはは気安く返事をし、フェイトとほぼ同時にベッドに埋もれた。純白のシーツが仄かに暖かく、心地よい眠気を誘う。

そんな睡魔に支配されつつある意識の端で、なのははふと少年に思いを馳せた。

彼のあの戦闘には、迷いが無かった。ただ目の前の敵を伸す事、それだけを考え、本能的に殲滅してきた。

それが彼の地、真の心だとは　なのはには思えない。

きつと、あのマモーとか言うロストロギアの、強大すぎる力に魅入られ、性格が捻じ曲がってしまったのだ　かつて、自分の隣で目を閉じている親友の母が、もう一人の実の娘を復活させようと、同じくロストロギアに固執したように。

恐らく彼に目的というものは介在しない。ただ闘い続ける。その欲求は留まることなく、自身が壊れるまでか、周りに闘う相手がいなくなるまで、ずっと続く。

なら、止めなければならぬ。

なのはは現在時空管理局武装隊にて日々厳しい訓練に押されており(そんなわけで他人の事も言えない程学校も休みがち)、ゆくゆくは戦技教導官に　未熟な若造を導く師を目指している。入隊して五ヶ月、今や個人の長所と短所を見抜けるようにまで成長したなのはには、同時に『正しく導かなければならない』という使命感も根付いている。

ロストロギアに振り回され、徐々に身を削られていく苦しみ……それはどちらかと言えばフェイトの方が分かっていそうだが、しかし自分にも理解できる。そんな少女と出会い、ぶつかった時の記憶は未だ新しい。

叩き潰してでも、止める。そして、導く。

重い目蓋に視界を遮られつつある意識の中、強い決心がなのはの胸中に灯った。

断章

いずことも知れない暗闇の中、一人の少年が足音も高く部屋の中へと踏み入った。

「ふう……。やれやれ、最近の魔導師は手荒いったらないね、マモ」

『It is an agreement. (同意です)』

機械的なりバーヴの返事を聞くと、少年はその手にある杖をくるくると回し、命令を発する。受け取った杖は三段層の内一つを開き、中にある小さな長方形を複数吐き出した。

宙に舞うそれを少年は左手で一薙ぎに全て回収し、手を開いた。その中にあるのは、桜色と金色に着色されたいわゆる『メモリースティック』。

近くにある事務用机に桜色のスティックを置き、金色のそれをじつくりと観察した。やがて置き、桜のスティックを拾い上げて、

「……………?」
ふとした違和感を覚える。

「これは……容量が、ギリギリになっている?」
暫し凝視し、その中を探るように隅々まで目を奔らせた。少年の意識の中には、メモリの中にある情報が羅列されて行っってはスクロールしていく。

ぴたり。と、脳内のスクロールが止まる。

「……………」
中距離用直射砲撃魔法、固有名称『デイベインバスター』。その魔法が、メモリの容量の大半を占めていた。

もう一つの誘導操作弾『アクセルシューター』とか言う魔法もそこそこ容量を使っているが、前者が八割を占めているこの状況普通なら有りえない。何より、たった二つの魔法でこのメモリース

ティックが埋まるということは、ここ数年では一度も無かった。

この魔法を使った魔導師は 確か少女だった。そう、純白のジヤケットに身を包み、魔法を繰る度に桜色の羽根が舞い散るような、そんな少女だった記憶がある。

「……………」

果たして畏怖か武者震いか、少年の身体は一つ大いに震えた。

その目には、恐怖というものは皆無であり、逆に、燃え滾る好奇心の炎があった。

小学四年生の多忙な日常

公称至って普通の小学生高町なのは朝は早い。

朝四時半、季節によつては日の出とほぼ同時に起床、着替えした後、お馴染みの高台にて魔法の練習。朝食の時間まで広域防御魔法や誘導操作弾等の訓練に徹した後、また朝食の時間から学校の昼休みまでレイジングハート監督のいわゆる『魔導師育成ギブス』なる物を装備、怖ろしく強い負荷をリンカーコアに受けながら日々を送る。更に授業中は真面目にノートを取りながら更にレイジングハートから送信される仮想戦闘データを基にイメージファイト、つまり二つ以上のことを同時に行なうマルチタスクの訓練に励んでいる。放課後は結界魔法を張つた後砲撃魔法の実射訓練。疲労も伴うが、大切なことなので欠かさない訓練である。

宿題を終わらせら今度は夜の上空まで赴き、主に飛行訓練。高火力・重装備のなのは故に装備が重いので日々効果的な機動ルートを模索している。

疲労困憊するまで練習して、風呂で疲れを取り、夜八時半には就寝。

全力での睡眠から明けると体力・魔力共に完全回復。

以下日曜以外これを繰り返す。

クロノにも呆れられる程の過酷なトレーニングメニュー、何と云うか日常の時点で無茶すぎのような気がしなくてもないが、本人とその愛機はお互い向上心に燃えているので誰にも止められない。歯止め役のフェイトも既に諦めている。

そんないつもの夜の訓練の最中。

「白装束……レイジングハート、バリアジャケットのデザインって替えられたっけ」

月に照らされる空にて、気にしていた少年の悪口、その改善策を相棒に向けると、

『Impossible. (無理です)』
きっぱり断られた。

「う……でもこのジャケットのデザインはレイジングハートのものじゃん。ダメなの？」

『There is not a clear image, and the reason is because it is troublesome to exchange now. (明確なイメージが無い上に、今更替えるのも面倒だからです)』

「む……あ、じゃあ私が絵にしたら替えてくれる？」

『White becomes a master. (マスターには白が似合いますよ)』

「しょうがない、諦めるか」

あっさり言い包められたところで、ピピピ、という呼び出し音が鳴る。

「ん？ なんだろ……あ、ユーノ君？」

『こんばんわ、なのは』

開いたウィンドウにユーノの顔が映る。と、途端にその横にも複数同じ物が開かれ、全ての窓にある顔がなのはを見つめた。

「え、ええ!?! あ、そっか。集団通信だね」

『そう。ちよつと重いけど、これが一番手っ取り早い』

それぞれの窓の中には、ヴィータやシグナムなどの八神家の顔ぶれや、親友のフェイト、クロノとエイミィのツーショットなどがあつた。

なのはの言う『集団通信』は、主に複数箇所にいる相手に同時に連絡を取るためにある通常通信のプログレス版である。そのため回線が複雑になり処理速度が若干遅くなるが、あまり体感できるレベルでは無い。

『で、何なんだよ、全員呼び出してまで言いたい事って』

ヴィータが若干ふて腐れながら言った。ユーノはどうどうとそれを押さえて、

『重要なこと……でもないかな。僕の親戚のこと、身元が割れたんだよ』

『結構重要じゃねえかよ！』

はやてと共に「なんでやねーん！」と裏手で突っ込みながらヴィータが叫ぶ。

『……………。で、誰だったんだ』

クロノがその様子をエイミィと共に見届けてから、訊いた。ユーノは全く動じた様子も見せず、

『うん。今、顔写真を送るね』

目線を下に落とし、何かを操作。数拍と待たず右端に少年のバストアップ写真が表示された。

『クラドニル・スクライア。去年に集落から姿を消し、以降行方不明。現在十歳』

事務的に話すユーノは、続けて、

『この顔は確かに見覚えがあったよ。昔古代遺跡で何度か顔を合わせたことがある……。一度魔法を見せてもらったんだけど、なのはの時よりは劣るけど、でも凄かった。当時は八歳だったっけ、そんな幼い頃から魔法を使い始めて、その頃からまともに使えるようになったのが防御魔法だった。二人の砲撃を受け切ったのが、なんだか腑に落ちたよ』

思い出を交えて本人の情報を並べ始めた。

『でも……少なくとも、クラーディはあんな、酷いことを平気でするような子じゃなかった』

「クラーディ？」

『ああ、クラドニル君の愛称だよ。周りにそう呼ばれてた』

なのはの疑問に答えながら、

『とても、優しそうな子だった。実際優しかったよ。怪我をした子にはすかさず治癒魔法をかけてたし、古代遺跡でたまにある落石な

んかからも身を挺して他の人たちを守ってた。でもそのときは結構小さい頃で、魔力自体弱かったからあまり効果は無かったんだけど、でも、その心意気は大したもんだと褒められてた。多分、その頃からだろうね。防御や結界などのサポート系魔法の修行を始めたのはユーノの話を聞く内、なのはは何時か予想した自分の考えがほぼの中しているだろうと踏んだ。話を聞く限りでは、彼はやはりマモーというロストロギアに吞まれている。故に我を見失い、ただ暴れているだけなのだろう。

ぶっ潰すという野望の炎が再び瞳に宿るなのはは置いて、横からクロノが割って入る。

『と言うことは、あの防御魔法は自前ということ確定か？』

『ほぼ十中八九、ね。時々一緒に練習してたけど、日に日に堅くなってるよ』

『そうか……。よし、皆よく聴いてくれ。対策は先日話した通り、反応が出たら即座に対応できるよう準備しておいてくれ。そして、決して一人で挑むということはしないこと。喧嘩馬鹿のフェイトとシグナムは特にな』

『あー、ひどーい！』

『クロノ執務官、私は決して馬鹿と言うほど……』

『客観的に見たらどっちもマニアだ。ヴィータの裏付けもある』

『え、え！？ ま、待てシグナム！ 何でここでレヴァンティンを構える！？ いや、あれは口が滑っただけというか（Explos ion!）いいいっ！？ お前も乗り気なのかレヴァンティン！ ああ！ 止めてよはやて！ はやてに絶対忠誠を誓っているシグナムを止めてくれよ!!』

『何や面白そうやからしばらくこのままな！。あ、シャマル、結界張っついて』

『準備完了です』

『我が主、こちらへ』

『ゲッ、味方がいなくなっただ！ クソッ、お前ら全員敵か！？ お、

落ち着けよシグナム！ 共に千年以上肩を並べて闘った仲じゃねえか！ え？ 『もう……戻れんのだ！』 って何名台詞かましてんだよ！ 繋がんねえだろ！？ ちょ、ま、まあああ ツ

！！（ドギヤアアアア）』

八神家を映していたウィンドウが砂嵐に見舞われ、数秒後消えた。外界の音を全て遮断するはずの境界内にいるなのはの耳に、何か破壊される音が届いた。

「ヴィ、ヴィータちゃん……」

『シヤマルがいるから心配ない。ではユーノ、この会合はここまでと言うことでいいか？』

『うん、いいよ。ただひとつ申し添えて置くけど、クラーディはもう昔の彼じゃない、と考えたほうがいい。あの子にはもう優しさという感情がどこかへと消えている……そう思って、対峙したほうがいい』

『では皆、各自準備を怠らないようにな』

クロノの締めで全てのウィンドウが同時に消え、空になのはが一人残った。

「はやてちゃん家が近いけど……お見舞い行ったほうがいいかな？」

『Don't worry（心配ないですよ）』

レイジングハートに諭され、なのはは鍛錬に戻った。

「やれやれ……。じゃ、僕は先に上がるぞ、エイミィ」

「ん、お疲れさまー」

管制艦アースラにて、集団通信を終えたクロノとエイミィは、直後そんな会話をした。

首をぽきぽきと鳴らしながらクロノが歩き始め、出口へと向かい

「く、クロノ君！」

もう一歩のところまで、エイミィに呼び止められた。

「何だ？」

「ちよつとこつち来て！」

必死な声色なので小走りで近寄り、少々顔色が青くなっているエイミイに問う。

「何だ？」

「これ……ちよつと見て」

「ん？」

クロノが目を向けると、そこには宙に浮かぶお馴染みのウィンドウ、そして書かれている文字列。何の変哲もない画面なのだ。

「これがどうかしたか？」

「ちゃんと読んで！」

いい加減喧しいのでその文面に目を走らせる。と、

「これ……メール？　だが、今時こんな物なんて使わなくても、念話とか色々あるだろうに」

クロノの言う通り、魔法技術が発達した昨今、例として地球上で多用される電子メールなどはほぼ壊滅状態にある。わざわざ文で示さずとも、直接連絡を取るという手段が最もポピュラーだからだ。先程の集団通信もそれに含まれる。

「だけじゃなくて、その内容も」

「んん？」

ぱぱつと目を奔らせると、そこにはこう書かれていた。

『拝啓　時空管理局様

秋涼の候、さわやかな秋となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

私ミッドチルダ出身、クラドニル・スクライアと申します。

此度は、其方に御在籍である魔導師、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、ユーノスクライアに御迷惑をお掛けし、厚く御詫び申し上げますと共に、御招きしたい事項が有り、御連絡とさせて頂きました。

三日後、夜明けと共に私は海鳴市海岸上空へと参上致します。付きましては、管理局所属高町なのは女史、及びフェイト・T・ハラオウン女史を御招待致します。宜しければ御友人もお誘い合わせの上では非御越し下さいませ。

敬具

追伸：リミッターの解除を推奨致します』

やけに畏まった、いわゆる『招待状』という奴の内容が、書かれていた。

「……………エイミィ。地球の現地時刻は何時だ」

「ええっと……………夜の、九時ぐらい？」

「全員召集だ。作戦会議を開くぞ。早く呼び出してくれ」

「でも、なのはちゃんはそのろそろ寝てる時間だよ？」

「構うもんか。一人の睡眠時間と世界の安全、どっちを取るんだ、

エイミィ？」

決戦【上】

びゅーびゅーびゅー

唸る風の温度は、早朝と言うこともあって、かなり冷たく。ジャケットを着込んでいるはずの少女二人も、少々強張った顔をしている。

いや、この緊張気味の顔は、寒さと言うものだけではなく。これより始まるであろう戦いにも所以するのだろうか。二人は、その手にある杖を、一層強く握った。

「奴の要求通り行くと、なのはとフェイトがフロント、ヴィータとシグナムは援護、はやては超長距離狙撃……」と言うことになるか」

「属性付きのテストアロツサを前に出すのは危ねえんじゃね？」

「それより私が後ろに回るといのがそもそも納得出来ん」

「しかし、要求に背けばどうなるか分かったもんじゃないし……。それとシグナム、落ち着け」

「もともと私は中距離はそんなに得意じゃないから、ちょっと嬉しい配慮かも」

「むしろ私が後ろに行きたいくらいなんだけどなあ……」

「まあ我慢しろ、なのは。距離をとればいい話だ」

「私が狙撃ってゆーのは変わらんままなんやなー」

「でも……クラーディは、よっぽど自信があるみたいだね」

「そうだな……。少なくとも二人の力量は知っているはずなのに、しかもまだ知り合ってもいないヴィータやシグナムも呼ぶとは、あえて自分が不利になるように要求していると思えん」

『もしかすると、いつぺんに片付けちまう算段なんじゃねえか？』
『考えられるけど、結構無謀やる、ヴィータ。なのはちゃんとフェイトちゃんとシグナムいつぺんに相手したらどないな目に遭うと思っ。』

『そりゃ、一週間は動けない身体にされるだろうさ』

『つまりはそう言うことっちゃ』

『それはともかくとして、どうする、なのは、フェイト。応じるか？』

『もちろん！』

『え、ちよ、なのは！？』

『私ね、クラーディって子、ただ暴れているだけだと思うの。あのロストロギアの力に吞まれちゃってるだけなんだよ、きっと。だから、ちゃんと押さえる。ちゃんと導かないと、また迷っちゃうかも知れないから。だから……フェイトちゃん』

『……。うん、分かった。私も、協力するよ。自分の技をコピーされっぱなしなのは、気持ち悪いし』

『そっちかよ』

『まあいい。では各員、三日後だ。ちゃんと準備しておいてくれ。通信終わり』

(……フェイトちゃん)

なのはは思考のみで、自分の目の前、少し離れた場所で同じく待ち呆けている友に話しかけた。すぐに返事が来る。

(ん、何、なのは？)

(絶対、勝とうね)

(うん)

それを今生の別れの挨拶とするかのように、二人とも黙りこくった。

今、二人の少女が向いている方向は東、数本の光の筋が次第に太

くなりつつある夜明けの空である。ちなみに上空にはヴィータとシグナムが宙で胡坐をかいて居眠りしている。

現在、二人の身は、今までにない開放状態にある。本来AAA+ランクという強大な力を持っている二人は、僅かばかりだが制御設定を施されている。いわゆる『リミッター』という物で、簡単に言えば重りである。結果、AAAランクまで落とされているのだが、クラドニルの要求によって管理局は渋々リミッター解除、本来の魔力を保持している。久しぶりの開放感になんとなく薄い妖気が出ているのだが、二人は一向に気にしない。その頭の中にあるのは、これより来たる敵の事のみだ。

二人の間に、翡翠色の魔方陣が、鈴の音と共に展開された。

『っ！』

二人は同時に目を向け、杖先をそこに向けた。

ゆっくりと回転する円は徐々に光を増し、細い光の柱を複数建てた。その中央に、人形のシルエットが浮かび、足元からはつきりと復元されていく。

やがて頭の髪の毛まで具現化されると、少年　クラドニル・スクライアは、閉じていた瞼をゆっくりと開いた。

「ふう……お早うございます、御両人。良かった、ちゃんと来てくれたんですね。すっぱかされるかと思った」

などと呑気なことを言いながら、移動魔法による酔いを醒ます為か頭を振り、右手にある木片と見紛う杖をくるくると回した。

「……………。改めて言います。異世界での多数の事件の容疑者として、また、数日前の民家襲撃の容疑で、あなたを逮捕します。抵抗しなければ、あなたには弁護の機会がある。武装の解除を」

フェイトが、バルディッシュの先端を鬼気と共に向けながら言ったが、

「口説いすねえ。先日的一件で分かったでしょう？　僕は投降す

る気なんか無いってことが」

やはりバツサリ断られた。

「それにしても、今日はやけに気合が入っているというか……あなた達二人と、上にも魔導師……というか、騎士がいらっしやるよう
で。やれやれ、みんな強そうだ」

「……ヴィータとシグナムのこと、知ってるの？」

フェイトが緊張の面持ちで聞いた。

「ええ、この世界じゃ有名ですよ。『夜天の書の主を救うべく、異世界の魔導師や生物を狩り、リンカーコアを集めまくった重犯罪者』
って事でね。ああ、機密でしたかね？」

ヴィータが高速移動で殴りかかろうとしたのを、大体同じような
表情をしているシグナムが止めた。

それにしても、話せば話すほど奇妙な少年だ。彼の言う通り、は
やての『夜天の主』やヴィータやシグナム等の『ヴォルケンリッタ
ー』の出自の暴露、または個人データ等は時空管理局で厳重に禁止
管理されている。一介の魔導師が知っているはずは無いのだが、ど
うもクラドニルには裏ルートのものがあるらしい。

「とは言え、いっぺんに四人相手するのも面倒ですね……。全員
それなりに強いし。しょうがない、ちよっとハンデを付けさせてく
ださいね」

クラドニルが杖を正中線に構え、足元に光る魔方陣を表した。何
をする気だ、と現場一同身構える。

「展開」

と、

クラドニルのたったその一言で、

「っ!？」

ヴィータとシグナムは吹き飛ばされた。

いや、そうでは無い。弾き出されたのだ。原因は、彼女らの足元
に広がる、異様な色を帯びる半円の殻。

(結界!?!)

その内部には、なのは、フェイト、クラドニルの三人の姿がある。結界の大きさはそれほど大きくもなく、かと言って小さくもない。ミドルレンジ対応の闘技場サイズだ。しかしその背景が異常で、遠くに見えるはずの町並みが、それどころか、足元に広がっているはずの海面すらない、虚無が広がっていた。

「この結界はちよいと特殊でしてね、結界破壊の特性を持つ魔法でも壊れない仕様なんですよ。よろしければどうぞ、試してみてくださいさい」

クラドニルが言った直後、遙か遠方からの白銀の砲が結界に衝突した。おいおい、という顔のクロノが、更に遠い場所にいるアースラ内で呆れる。

砲の名を『フリースヴェルグ』。広域型に特化しているはやての遠距離砲撃魔法であり、その破壊力は折り紙付きである。何時だったか実射されたことがあったが、簡単にユーノの結界が吹き飛ばされた実績を上げた。

それほどの威力を持っている、にも拘らず。

結界は、いつまでも砕けない。それどころか、衝突時に揺れもしなかった。

これには撃った当人、そして見ていた護衛の騎士、はたまた観戦している管理局一同を驚かせた。なのはの『スターライトブレイカー』でも試してみようと全員一様に一瞬思ったが、誰も言わなかった。

「でしよう？ この結界は通常の結界魔法とは違うんですよ。通常の結果は時間軸やオブジェクトへの干渉を遮断する、つまりは何事もなかったかのように見せる魔法です。しかし、この殻は違う。これはね、『一定距離を世界から切り離し、異次元へと持っていく』

と言つた代物なんです。分かりますか？ つまり、高町なのはさんと、フェイト・T・ハラウンさんは、今海鳴市の海にはいない。いわゆる『虚数空間』の中にいるんですよ」

「！？」

虚数空間。

かつて、フェイトの実母が既に亡きアリシアと共に堕ちて行った空間。

そこは如何なる魔導の干渉も許されない、いわば禁忌の場所。

「まあと言つても、僕の任意での解除があれば、ちゃんと元の場所には帰れますから、安心してください。後、虚数空間とは言つても、ここはやはり全く別の次元ですから、普通に念話とかの魔法は使えますよ。そうでなきゃ面白くないですから」

そんなクラドニルの呑気な解説。

「と言つわけで、これで外から邪魔をされることはなくなりました。さあ、正々堂々と闘おうじゃありませんか」

ああそうそう、とクラドニルは何かを思い出し、

「言つておきますが、僕はこれからあなた方二人を本気で殺しにかかります。そちらも非殺傷設定なんて甘っちょろい枷なんか付けてたら、まず間違いなく死んじまいますよ」

そんなトンデモ発言。まるで、と言つかそのまま『お前らも殺す気でかかってこい』と言っている。

「ここで決着をつけましょう。僕はダラダラ事を引きずるのが嫌いなんでね」

その一言に、少なくともフェイトの心中は穏やかではなかった。

ただでさえ甘めの性格をしている彼女にとって、非殺傷設定は強すぎる力を抑える、いわゆる抑止力。それのおかげで誰の事も傷つけることなく『バトルマニア』と呼称されても嫌な気がしなかった。それを外せと言われれば、当然揺らく何かがある。

だが。

『Excellion mode Drive ignition
レイジングハートの、強化コマンド。』

見れば、クラドニルよりも遠くにいるなのはの身体が桜色の球に包まれており、一瞬の後にそれが弾けた後、そこには、衣装こそ変わらないのはと、音叉状の『シューティングモード』から更にも

う一段階上の形状、槍とも見紛う『エクセリオンモード』となった
レイジングハート。

「……クク、いい度胸ですね。そういう真っ直ぐな女の子って、僕は好きだな」

何気に口説き文句を言いながら、クラドニルはフェイトを見やり、

「じゃ、あなたは？ 別にこの前の鎌でも結構ですけど」

「……………悪いけど、私はこれ以上手の内を明かすことはしない」

言うや、バルディッシュが変形、『ハーケンフォーム』となった。

「そりゃ残念。まあ、マモーの力は我ながら面倒ですからね」

そして三人、全員が、自分の杖を構えた。

左右から狙われていると言うのに、クラドニルは少しも慌てる様子を見せない。

なら、遠慮なく、叩く。何がなんでも 止めてみせる！

なのはの意思が燃え上がったそのとき、

三者の足元に、それぞれの色の魔方陣が浮かび上がった。

決戦【中】

「ぶつち抜けええええッ!!」

ヴィータの雄叫びが朝の海に木霊し、ほぼ同時に強烈な衝撃が海を揺らした。

色の判別が付かないサイケな殻に向けて放った巨大な鎚は、しかしそこを通り過ぎて虚しく海面へと衝突し、海底に大きな穴を穿つ。「ちっ! シグナム!」

「そう急くな。レヴァンティン」

「Jawohl!」

今度はシグナムの左手にある剣が叫び、その主は右手に持っていた鞘の先端をグリップに付けた。途端、鞘と剣は光の塊となりトランスフォーム、一本の弓と成った。

シグナムが弦を絞ると矢が顕現し、光を帯びて力を増す。

「駆けよ、隼ッ!」

「Sturmfalken!!」

言つと同時に手の矢は飛翔し、音速を越えて殻へと吸い込まれていく。が、やはりと言うべきか、その矢も水面を貫き、海底へ着弾と同時に火炎と衝撃を撒き散らした。

「やはり無理か……。どうします、ハラOWN執務官」

シグナムが訊くと、

「無駄な魔力消費は控えた方が良いでしょう。悔しいが、待つ他は無い」

クロノが通信で返してくる。

「なんなら私の『フリースヴェルグ』、もっぺんぶつけてみるけど?」

「やめとけはやて。今は力の温存が最優先だ」

なのはとフェイトがあの中へと幽閉されて二分後、猛り立つ

たヴィータがいきなりフルドライブ、巨鎚『ギガントシユラーク』
で以って挑みかかった。が、その巨鎚は宙を空振り、無駄に地殻を
揺らした。

暫しその事実にも然とした後、我を取り戻したヴィータは諦める
事無くもう一度二度とぶつけてみたが、どれもヒットどころか掠り
もしなかった。シグナムの『シユツルムファルケン』、合流して来
たはやてのほぼ零距离『フリースヴェルグ』でも一向に効果は見ら
れなかった。

『どうやら奴の言った通りらしいな……。あの殻はただの結果じゃ
ない。別次元そのものなんだ。外部からの干渉が全て禁じられてい
る、まさに「虚数空間」……』

「ヴィータ、無念だが、我らはここで待つとしよう。考えたくは無
いが、万が一、テストロツサたちが負けてでてきた時は」

「おいシグナム、てめえッ!!」

将の一言で沸点に到達したヴィータの怒りは、シグナムの胸倉に
掴みかかることで更に燃え立つ。

「負けるってのか!?　なのはが負けるってのかよ!!　ふざけん
な!　あいつが負けるってこた、そりゃあいつに……!」

「ヴィータ」

「ンだよッ!」

パシン。

振り向いたヴィータの頬に平手一発、放ったはやては諭すように、
「ここでシグナムに八つ当たりしてもしゃー無いやる。それに、シ
グナムだって同じような気持ちや」

見れば、滅多に表情を改めないあのシグナムの顔が、僅かに歪ん
でいた。その度数は微々たるものだが、長年共に歩んできたヴィー
タには、その顔がとても悔しそうな色と判った。

「ヴィータにとってなのはちゃんが必要のように、シグナムにとっ
てもフェイトちゃんが大切なんや。気持ち、汲んだりや」

鉄槌の騎士は一瞬で落ち着きを取り戻し、

「……………ごめん、シグナム、はやて」

「気にするな。私の言葉も、少々不謹慎だった」

ふふ、と仲直りの印としてお互いに笑い、

「でもさ、はやて」

「ん？ なんやヴィータ」

「あたしにとつて一番大切なのは、はやてだからね」

今度ははやてが微笑み、

「ありがとうな」

ヴィータのその頭を撫でた。

悔しいが、今は何も出来ない。祈ることしか出来ないけれど

なら、精一杯祈ろう。まだあたしは、あいつにまともに勝ってないんだから。それに、例え負けて帰ってきたとしても、その時はあたしがそいつをブツ叩いて落としてやるよ。

元の形に戻ったグラーファイゼンを握り締め、落ち着かない心を無理矢理押さえつけて、ヴィータは宙にどっかと胡坐を掻いた。友と呼べる、彼女の身を案じながら。

「　　っはあああああつ！！」

金色の軌跡を残して振られたその鎌は、

「フン！！」

翡翠色の盾に阻まれ、弾かれる。

『B a r r e l s h o t』

無色透明、風のような砲撃は、

「あつ！ フェイトちゃん避けて！」

「わわっ！」

どこかへと消えた的を通り越して戦友を掠めた。

「どこに」

「なのは、後ろッ！」

「ッ！？」

振り向く白魔導師は、そこに、

「オオオッ！」

翡翠色に輝く鎌を下段に構え、今まさに切り掛からんとする同志を見た。

『Round Sealed』

咄嗟に展開した桜色の魔法陣の盾でどうにか防ぐも、圧倒的な腕力によつて弾かれてしまう。結果、フェイトに抱き止めてもらう形になった。

「あ、ありがとうフェイトちゃん……」

「油断しないほうがいいよ、なのは」

と僅かに会話する暇も与えず、

『Master!』『Sir!』

二者のデバイスが注意を促す。顔を上げれば、四方八方から無数の弾丸が飛来してくる。

『ッ!』

気づいた途端にその全てが着弾し、バババババという音と共に煙が朦々と立った。

「……………」

クラウドニルはフェイトを飛ばした位置でなのはのコピー技『アクセルシューター』を放った体勢で留まり、その様子を見ていたが、予想通りの結果を見て、安堵半分呆れ半分の苦笑を顔に貼り付けた。球体のシールドに守られ、少女二人はまだ生きている。

「やれやれ、なかなかどうして堅いなあ。まあ早々に死なれるのも困るんですけど」

呑気なことを言いながら、その手の杖を構え直す。

一方のなのはとフェイトは、両者共にかなり息が上がっている。（非殺傷設定の解除って……こんなに強くなるものなの……!?）

今の防御魔法の展開、着弾時の衝撃によりギシギシと悲鳴を上げる腕を魔力フィールドで押さえながら、なのはは心の底からそんな感想を抱いた。

クラドニルの一撃一撃は、それこそ一発食らっただけで死に至りそうな、殺意の塊である。今はどうにかシールドとスピードでやり過ごせているが、ともかく全ての攻撃が重く、速い。一瞬でも気を抜けば 死。

つまり、殺すか、殺されるか。

ほぼ人生初の死への恐怖を味わいながら、なのはレイジングハートを構え直す。なら、殺される前に落とせば良い話だ、とプラス思考に切り替える。

(フェイトちゃん……)

(うん、なりふり構ってられなくなってきたかも……)

この戦闘が始まって既に二十分、なのはとフェイトは身体の傷こそ少ないものの回避と防御に疲労を強いられ、片やクラドニルには汗一筋見られない。不条理気味なこの状況に若干腹を立てながらも、彼女らの頭は未だ冷静である。

今まで何度か斬撃と砲撃を加えてみたが、全て彼の鉄壁の言葉が似合うシールドに阻まれてしまい、殆ど通っていない。ザフィーラもびっくりなああの盾を如何にして掻い潜るかが現在の課題だ。

(かと言って、それに長い時間はかけられない……模索している間も向こうは攻撃してくるから、効率的な方法を考えないと……)

フェイトは肩で息をしながら考える。いざとなったらこの鎌を更に変形させて、雷を伴う大剣『ザンバーフォーム』を出すしかないか……と考えたとき、自分の傍らにいる親友が、

「……ねえ、クラドニル君」

なのはが、相対する少年に話しかけた。

「はい？」

「どうして、こんなことを続けるの？」

どこか優しい声色で、なのはは続ける。

「ずっと、ずっと気になってた。君がスクライアの集落を抜け出したのは去年で、その短い間に君はその杖を使いこなしてる。きっとマモーが覚えてる記憶を元に君は闘ってるんだろうけど……」

この辺りは先日ユーノから聞かされた話である。

「でも、私が知りたいのは、君がなんと為にこんなことをしているのか」

「……………」

クラドニルは、色を失った表情でなのはの言葉を聞き続ける。

「君の動き、と言うか、今まで犯した罪の内容、管理局の方で洗ってもらったんだ。詳しく調べてもらったら、君が今まで戦った相手はどれも歴戦の魔導師　とても強い、魔導師達ばかりで、しかもどの人もレアスキルを持った。ある人は隠蔽魔法の達人だったり、またある人は近接魔法の師範代だったり。　これだけ強い相手と戦い続けるって言うことは、何か理由があるんでしょう？」

クラドニルは、ふっと息を吐き、

「なかなかどうして鋭いなあ。　ところで、そんなことを知って、どうするって言うんです？」

「もし、あなたがただの興味本位でそんなことを続けてるって言うのなら、私は、潰してでもあなたを止める」

「では、僕が何かしらの目的を持って行動していると知ったら？」

「協力する」

なのはは簡潔に言った。

「もしかしたら、私達に　管理局に、あなたのお手伝いを出れることがあるかもしれない。そうなら、私達は協力を惜しまない。ええと、例えそうでも、一度はこっちに来てもらうことになるけど…」

「…」

こっち、と言うのは管理局の裁判のことだ。それ言っちゃうのかよーとフェイトは内心で思うが、表情には出さず、依然構える。

一方クラドニルはそんななのはの言葉に、

「……………惜しまない、か。何とも心強いお言葉、痛み入ります。

でも、あなた方には、僕の協力なんて出来るとは思えませんか」

「え？」

「順を追って説明しましょうか」

クラウドニルはマモーを両手で持ち、どこか寂しげな目でそれを見る。

「僕はね　このロストロギアに、操られてるんですよ」

クラウドニルは語り始める。

「マモーはそちらで把握している通り、古代の産物、ロストロギアです。歴史あるこいつの生まれは、とある魔導師の一つの切実な願望の為に生み出された、始めはただのデバイスに過ぎなかった。その願望とは、即ち『世界で一番強い魔法を得る』と言うこと」

「……………」

「若かったんですね、その人は。　で、初めは着々と他人の強い魔導師の力をコピーしては利用して、自他ともにその実力を上げていきました。でもね、時が経つに連れ、マモーの力は強すぎるくらいになってしまった。結果、創った本人はその強大すぎるクオリティに気圧されて身体を壊してしまい、自殺してしまいました。主を失い、途方に暮れたこいつは、それでも自分が生まれた理由を、『世界一強い魔法を得ること』を忘れず、幾人もの使い手の元を転々としていった。その場その場でこいつは着実にレアスキルを集めていき、けれどどの場でも主を殺してしまい、最終的に僕の元に渡ってきた。　初めて僕がこいつに出会ってしばらく経った頃、直々に教えてくれましたよ」

まるで闇の書の同類だな、となのはは呑気にも考えていた。

「さて、僕が操られてるって言った理由はね、別に自律神経まで侵食されてるって訳じゃない。これも教えてくれたことなんですがね、どの使い手もマモーの力に魅了されて、そしてこいつの強い願望に突き動かされて、行動してるんです。いわば、『この杖を手にし、力を使った瞬間から、その者はこの杖に従う運命に置かれる』って事です。僕も洩れなく、その呪縛にかかってしまった。だからまあ、半分催眠と言ってもいいでしょうね」

「だったら　！」

私達がその呪縛から解き放つてあげる、と言おうとした途端、遮られた。

「もう一つ、理由があります。それは、僕自身、『世界一強い魔法』とやらを得たい、使ってみたい。そんな願いを抱いてしまつてると言つこと」

「……………」

「同情、つて言うんですかね、こいつと何年もやってると、自分もそういう考えを持つてしまう。だから、僕はこいつから逃げられないし、逃げない。僕はいつまでも付き添つていくしかない。世界一の、誰にも破られない魔法を掴むまで、いつまでも、ね」

長広舌を振るつたクラドニルは、乾いた唇を舐め、

「　　と言つわけで、僕を救うなんていう考えは早いとこ捨てたほうがよろしいかと。僕は例え捕まつても、こいつの為に魔法を探さなきゃならない運命の元にいるものでね」

言つやぶうんと杖を振り、なのはとフェイトに向かつて構えた。

「さ、早く終わらせましょう。そちらの消耗も激しそうだから、どうせ長くは続きそうに無いですし」

クラドニルが長らく語っている間、フェイトは半分もその内容を聞かず、あることに集中していた。

(何か引つかかる……そこを突けば、どうにかなるかも)

まず、彼の全身を見渡す。彼の装備はいつも見るユーノの戦闘服と類似しており、いつだったか彼の言つた通りあればスクライアに伝わる伝統の装飾なのだろう。と言つことは、ユーノのそれと同じくジャケットの耐久率自体はそれほど高くないはず。

(なら)

どうしてもっと耐久地の高い、例えば、なのはの重装甲な白ジャケットをコピーして使わないのか？

(そういえば)

フェイトが高速移動の魔法を使ったとき、彼はその魔法自体はコピーしたろうが、速くなる為の装備であるフェイトのジャケットはコピーしなかった。

いや、

(出来なかった?)

とすれば、

(なるほど、そうか　でも、まだ壁はある)

それは、彼の盾だ。堅い上に展開するスピードも速いと来ている。まさに壁と言うに相応しいあの防御魔法をどうすれば抜けるか

フェイトには出来ないことも無い課題だ。つまり、

(防がれる前に、展開するスピードを上回る速さで攻撃すれば当たる!)

一つの結論が芽生えたところで、

(なのは、作戦が決まった。私が向こうの気を逸らすから、なのはチャージの準備をして)

丁度クラドニルの演説が終わったところで、なのははその言葉を聞いていた。

(え、でも、どうやって?)

(見てて。結構賭けだけど、上手く行けば、どうにかなる)　なのはは暫しその賭けとやらに逡巡し、

(　うん、分かった。フェイトちゃんを信じるね)

(ありがと、なのは)

金髪の少女は、鍵を握る自分の資質と相棒に、だいじょうぶ、と伝えた。

決戦【下】

びっくり、と少女二人の内一人が動いたのを、クラドニルは見逃さなかった。

動いたのは、白装束と称した魔導師　確か名を、高町なのは。何をするつもりだ　と思った瞬間、彼女の足元と正面に同色の魔方陣が展開され、正面のその中央には周囲の魔力を集めた光球が見る見るうちに膨れ上がっていく。

砲撃！

あの大きさは尋常ではない。恐らく彼女の切り札だろう。あれは盾で受けても持たないなら。

クラドニルは邪悪な炎を瞳に宿し、撃たれる前に撃たんと移動魔法で距離を詰め切りかかろうと構えた。

瞬間。

『Zanber form』

渋い声色が耳に届いた。振り返ると、黒のマントがどこかに消え、見るからに身軽な少女が金色の大剣を振り被っている。

いつの間に！？

思った瞬間、彼の思考は加速した。ああそうか、僕があつちの白に気を取られた瞬間、こっちの黒が神速で詰め、この状態に至るとクラドニルは加速ついでに咄嗟に盾を展開しようとして　開いた手を通り抜けて刃が襲い掛かってくる。

速いと思う暇もあればこそ、次の瞬間彼はその大振りな剣に叩かれ、ものの見事に吹っ飛ばされた。

初、と言っていいまともなヒットである。

「がはっ！」

ぐるぐると惰性に従って空中を回り、途中で無理矢理急停止、斬られた胸元を押さえてクラドニルは咳き込んだ。このジャケットはスクライア伝統のそれであり、先頭に立って攻撃していく者の為の重装甲程厚くはないため今の一撃はかなりキツイ。一瞬頭に血が昇り、しかしすぐに降りる。

キーンッ！

デジャブを感じる音響と共に自分の両手足にいつかも見た金色の枷が嵌められ、身動き取れない体勢にされたからだ。
焦る脳内。

「くっ　こんな物、すぐに……マモー！」

呼びかけ、何時か誰かからコピーしたバインドブレイクの魔法を発動しろと愛杖に命令し、

何のいらえも返さなかった。

「！？　おい、マモー！　どうし　、ッ！？」

クラドニルは左手にある杖を見、そして絶句。

「ごめんね」

空中にいるフェイトが、クラドニルに聞こえないほどの声量で、静かに詫びた。

マモーの本体部分　三段構造であるところの二段目に、深い切り傷が入っていた。そこから、幾筋かのスパークが耳障りな音と共に散っている。

まさか、さっきの一撃の時に　？

目を上げれば、既に砲撃担当の少女のチャージは満と言ったところか、身の丈を超してもうあの球しか見えない。

あれを食らえば、間違いなく　落とされる。

「くっ　、うおおおおッー！」

猛り叫んで、彼は有りつ丈の魔力を杖に流し込み、一瞬で修復した。

『Recovery』

回復、と言うコメントを残したマモーの声と、弾けた枷が何よりの証拠。

「!?!? くっ!」

顔をしかめたフェイトがもう一度斬りかかろうとするが、翡翠色の波紋が広がる壁に阻まれた。今し方彼が展開しようとした防御魔法だ。

フェイトは賭けた。親友たるなのはの最上級の砲 『スターライトブレイカー』に。

なのはは受けた。親友の信頼を乗せた最大級の砲 『スターライトブレイカー』を。

クラドニルは何故か彼女達のそんな感じの心境を読むことが出来る(名称もこれまた何となく)、

ならば 僕は、こいつの力に、賭ける!!

バリアバースト、それも絶妙なコントロールで、フェイトのみを弾き、クラドニルはその場に留まって、足元に安定用の魔方陣を展開、マモーをなのはに向ける。

そして、叫ぶ。

「マモー! でかい獲物だ、逃がすなよ!!」

『consent!』

逸る気持ちに乗ったクラドニルの勢いに乗ってか、マモーの応答の声も心なしが高揚じみて聞こえた。

そして始まる、今までに無いくらい、大きな複製作業。

『Reproduction start!』

なのは聞いた。彼の渾身の叫びを、デバイスのコマンドを。
なのはの大技『スターライトブレイカー』のチャージは既に八割を終え、密かに行なっているレイジングハートのカウントも残り少ない。あとは振り被って撃つのみ　という所で、彼女はあえて一瞬だけ、モーシオンを遅らせた。

一方、スキヤニングを終わらせ、メモリに保存しつつ自分も撃つてせめて相殺せんと構えたクラドニルだが、その保存中、身体の各所が悲鳴を上げ始める。

それはそうだ、と彼は苦笑した。あの放射魔法は集束型、周辺に散らばる微細な魔力を掻き集めていくので、その分魔力も跳ね上がる。と言うことは、撃つ方に負担がかかるのは道理であって、よってクラドニルも、恐らく彼女も、身体が軋んでいる。

だが、そんなことはどうでもいい　そう思い、数瞬でチャージを終え始めた自分の相棒に微かな誇りを感じつつ、それを振り被って

杖に、亀裂が走る。

「!?!」

まずは持ち手から、そして徐々にそれは広がって、本体部分まで届こうかとした時、クラドニル・スクライアは、確かに聴こえた。

『Because I exceed permission capacity, the saves more than this are impossible. (許容量をオーバーしているため、これ以上の保存は不可能です)』

つまり、もうなす術が無くなってしまった、と言う無念の警告。

それを見ていたなのは、杖を構えなおし、

「スターライトお……」

ぐっ、とオーバーヘッドに振り被り、

「ブレイカーっ!!!」

全てを打ち砕く、星光の砲を放った。

桜色の野太い砲線は、迷わず一人の少年の身元へと奔り、そして彼自身を飲み込んだ。

全てを諦め、そして受け入れた少年は、安らかな表情でそれを食らった。殺さない程度に手加減されたその威力に、少し悔しく思いながら。

そして、左手に力を込め　大破した、たった一年だけの付き合いの杖に、止めを刺した。

砕かれた杖は無数の破片と散り、そして大威力の魔力の奔流に巻き込まれ、更に細かく、粉となり、終には消滅した。

薄気味悪い色彩の巨大な殻は、徐々に薄れ、そして消えた。

終章

秋が深まり冬が来て、雪でも降るんじゃないかと思うほど寒い空の下を、なのはとフェイトは仲良く手を繋いで歩いてた。

両者共に茶色のダツフルコート、そして長い一本のマフラーの端をお互いの首に巻きつけている。どこからどう見ても仲の良いこの格好は先程邪魔していた家の家政婦的役割をするシャマルのコーデイネイトだ。

今日は、闇の書事件解決の一周年、並びににクリスマス及び先月の事件解決を祝うパーティだった。

今から約一ヶ月と少し前、少々大きな事件が片付いた。死者を少数ながらも出してしまった、恐らく今までの事件の中で最も奇矯な事件、後に呼ばれる『M事件』。

Mは、マモ어의M。

その終結が見えた十月の末、なのはとフェイト、両者の活躍により主犯者を見事逮捕、重要な証拠物件は消えてしまったものの、一応の終わりが告げられた。

現在主犯、ユーノの親戚に当たるクラドニル・スクライアは裁判の最中であり、本人も若いし罪を認めているのでそれほど重い刑にはならないだろうが、最低でも懲役十年は確実だろうと言うのがクロノ・ハラオウン執務官からの伝言。だが、彼はどんな刑が科せられようと受け入れると供述していた、とも。

先日、二人はクラドニルと面会した。

『 おや、御二方。少し御久しぶりですね。その節はどうも』

絶海の孤島、そこに建てられている海上隔離施設の第一面会室、モニタに映されている白い囚人服をまとった彼の表情は、とても和らいでいた。少なくとも失望に打ちひしがれている人間が出来る顔じゃない。

「こんにちは、クラドニル君。ユーノ君とは、もう?」

『 ええ、つい先日に出会いました。いやあもうこっ酷く叱られましたね。その内一族も来るそうですよ。今から気が重い』

「そ、そう……。えっと、大変だね……」

『 いやなに、大したことじゃありませんよ』

彼は朗らかに笑い、そして、

『 で、今日はどう言ったご用件で?』

と訊いた。

相変わらずの勘の良さに感服しつつも、なのはは一応訊いてみる。

「何で分かったの?」

『 御二人が愛の告白の為に来たわけじゃないって事ぐらい予想はつきますよ。まあどっちも美人だから受け入れるに否やはありませんが』

冗談なのか本気なのか判りづらい言葉は置いて、今度はフェイトが問う。

「えっと……その、マモーは? どこに行ったの? 現場を探してみただどこにも痕跡は残ってないし、君の検閲にも引つかかってないし」

その言葉にクラドニルはぴくりと眉を動かす、

『 ………………そうですか、見つかりませんでしたか。まあ、そりゃそうでしょうねえ』

「え? ど、どういうこと?」

『 マモーはね、僕の手で壊しました。あの時、あなたのあの馬鹿でかい砲を食らった時にね、高町なのはさん』

え? と本気で呆けたなのはに、クラドニルは、

『あなたのあの一撃　名前は確か、「スターライトブレイカー」でしたっけ。あれをコピーしようとしたら、マモーが教えてくれましたよ。「容量がでかすぎてコピーできません」って。びっくりしましたよ。集束型の魔法はいくつかコピーしたことがありますけど、それでも複製しきれないって事態に陥ったことは一度も無かったです。まあ、何となく予感はしてましたけどね』

「え？」

『あなたのもう一つの砲、「デイバインバスター」。あれも凄かったです。メモリ一つの八割をたったそれだけで埋めちゃうんですからね。確認したときは驚いたし、それに、確信もした。「あの魔導師からなら、世界一強い魔法が盗れる」　って』

実現は出来ませんでしたけどね、と彼は笑った。

『結果、自己崩壊したあいつを見るに絶えられなくなった僕は、この手であいつを壊した。どうせ修復は不可能でした。あとは、あの莫大な魔力砲に散り散りにさせれば、勝手に、完璧に消えて無くなるだろう、って言う算段だったんですが……どうも上手く行ったよ　うだ』

「……………ごめんなさい」

何かの責任を感じたなのは反射的に謝った。が、クラドニルはそれを、

『ああいや、気にしないで下さいよ。　それにどうせ、あれが最後のつもりでしたから』

「え？」

『言ったでしょう？　「あの魔導師からなら、世界一強い魔法が取れる」　って。確信したからこそ、僕はあの場で決心したんです。次で全部終わらせてやろう、と』

少し思い出してみてください、とクラドニルは言い、

『あの時に言いましたよね、「マモーの今までの主は、その誰もが圧されて死んでしまった」、って。あの時ね、実は僕も結構キてたんですよ』

二人が黙って聞いているので、クラドニルは続ける。

「僕もその例に洩れる事無く、あいつの力に薄々気圧されていた。毎日心臓が痛みましてね、ああ、この痛みを他の人も味わったのか……なんて感想も抱いちゃって。そしてこつこつも思った。どうせ死ぬなら、僕とマモーの両方の願いを叶えてからにしよう、とね」

クラドニルは己の右手を眺めながら、

「ああそうだ、あいつから聞かされたもう一つの思い出話、まだ言ってますでしたね」

悲しげに沈んだ顔を一瞬で明るくし、クラドニルは右手の指を一本上げて、同じ年である少女ら二人に言う。

「もう一つの四方山話……それは、「全ての主が最期の最期に口を揃えて言った言葉」。何だと思います?」

二人は顔を見合わせて、そして何も答えないので、クラドニルが解答を述べる。

「それはね、「他人の魔法をコピーしたって、結局つまらない結果にしかならないぜ」、だそうです」

クラドニルは続ける。

「努力して、苦しんで、そしてやっとの思いで発動が可能になった魔法を、あつさり掠め盗られていく悲しさ、空しさって言うのを、全ての主は魔導師として一様に感じたそうです。全員立派な魔導師で、マモーと出会う前も必死で練習してた人達だったから、その気持ちはよく分かったんだそうです。そしてマモーを使って、初めの内は嬉々としてその能力を使い、そして徐々に空しさに取り憑かれていき、最終的には皆自殺。その一部始終を、自分はすべて見えてきて、記憶野の一番深い場所に保存している、って言うてました。僕もその人達と同じような人種だったから、ちよつと感動もしたし、何より恐怖しました。自分もそうなるのかなって」

でもね、とクラドニルは紡ぎ、

「その時は既にマモーと同じ願望を抱いていたから、それほど長い間落ち込んだりはしませんでした。その直後にあなた方と出会って、

そして、負けてしまった。完敗でしたね』

そこで彼の後ろにある戸が開き、制服を着た男がクラドニルに何やら耳打ち。

『 ああ、もう時間ですか。それでは御二方、また出会うことがあればいずれ。更なる精進を怠りませんよう、そして、あなた方の望みが花咲きますよう祈っています』

そこで彼は立ち上がり、看守に引かれてその部屋を出て行った。バタン、と向こうの戸が閉まった瞬間に、二人の部屋にも看守が迎えに来て、二人を退場させた。

「……気の毒なこと、したかな」

なのは吐く息も白い寒気の中、街灯の下でふと呟いた。耳ざとく聞きつけたフェイトは、彼女と同じような悲しい表情を作って、「うん……きつと、クラーデイも悲しかったんじゃないかな。たった一年とは言え、相棒が消えちゃったんだから。 あ、別に、なのはが悪いとかそう言う訳ではなくって！」

手を振り回して必死に弁解する親友に、なのははにこりと笑い、「ありがと、フェイトちゃん。 でも、きつとクラドニル君なら、だいじょうぶじゃないかな」

自分で倒しておいて何だけど、と思いながら、空を見上げる。時間は、今から二時間ほど遡る。

クリスマス及び闇の書事件解決一周年及びM事件解決祝いと言うことで開かれた八神家での一時は、酒乱のレティ・ロウラン提督のハイテンションな雰囲気とその他多数のエキストラのおかげで必要以上に熱気が籠もり、開いた窓から入ってくる冷たい外気が心地良いほどになっていたがそれはさておき、肝心なのはその開会宣言時に言った、クロノの言葉が何よりの引き金となった。

「ああそうだ、皆聞いてくれ。例のクラドニル・スクライアは、ご存知の通り今も裁判の最中だ。詳しい刑の内容は知らないが、最低でも懲役十年は決まりだ。人死にが出てしまったからな……。で、彼が出所した後の話なんだが」

全員が、何かを期待するような眼差しでクロノを見つめた。視線の的となったクロノは一瞬詰まり、ごほんと咳払いをしてから言った。

「管理局で働いて貰おうと思っている」

クロノは異論（出そうに無いが）を唱えさせないように続けて、「彼の防御の才能は天性を感じるものがある。ザフィーラに勝るとも劣らない堅さは盾として重宝されるだろう。よって、普段は諸々な雑用に貢献、非常時にはすぐさま出勤してもらういわゆる『使いっ走り』的な席に甘んじてもらうことにした。目の届く範囲にいてくれれば保護観察もしやすいからな。まだ報告はしてないが、恐らく断らないんじゃないかな。そんなわけで、十年後ではあるが、また会うことになるかも知れん」

その言葉が、会場を大いに沸かせた。

「裁判にはクロノと母さんが付いてくれるから、それほど重い刑にはならないだろうって。少なくとも管理局の方で働けるように精一杯努力するって言ってた」

「さすがに偉い人の権利は凄いねえ」

呑気な声を上げるのは、鼻から冷たい空気を吸い込み、小さな口から吐き出した。白い蒸気となってその空気は宙に消える。

「とりあえず、また、会えるんだね」

「嬉しい？　なのは」

「……あんまり」

クスクスとフェイトが笑う。そこで、でも、となのはが、

「でも、また会えたらいいな、って思ってるよ」

「うん」

フェイトが返事をして、二人はふと上を向いた。澄んだ冬の空気は夜空の星を一層輝かせ、小さな恒星が散らばるその青天井は、とても綺麗で

「あ」

右頬に触れた小さな物になのは目を閉じ、そこを拭ってみると、一滴の水粒が手に付いていた。

「雪？」

晴れ渡っているこの空のどこから、なんて野暮なこと考えず、なのはは純粹に今年の初雪に目を輝かせた。

来たる未来は、きっと楽しいものだけじゃない。苦しいことや悲しいことだって、きっと付いてくる。

でも、私は迷わない。

迷わずに、真っ直ぐに、進んでいくんだ。

私の、大切な人たちといっしょに。

終わり

終章（後書き）

拙い文章ではありましたが、最後までお付き合いいただきありがとうございました。

いやあ、二次創作って素晴らしいですね。テーマが既存だからそれに沿って書いていけばいいし。オリジナル創作の小説の難しいことといったら……。

改めて都築市他多数の作家様達に敬服するいい機会でした。本当にありがとうございました。

読み終わりましたら、何かしらの感想をお寄せください。良いところも悪いところもバンバン指摘してください。ええ、傷つきやしませんから。ほ、本当ですよ？ 落ち込んだりしないもん……！

改めて、ここまで読了してくださり、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482/>

魔法少女リリカルなのは ~COPY~

2010年10月8日13時31分発行